



(2000年5月1日～2000年11月16日) No.43

国際会議「地域研究：これまでの経験とこれからのヴィジョン」 2001年1月に開催

2001年1月19日から21日にわたり、国際会議「地域研究：これまでの経験とこれからのヴィジョン」が、文部省科学研究費「中核的研究拠点形成 (COE) プログラム：アジア・アフリカにおける地域編成——原型・変容・転成」の助成のもと、京都大学東南アジア研究センターおよび大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の主催により、京都市国際交流会館に於いて開催されます。

本会議は二部構成で、第1部では、「研究機構の構築」をテーマに、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、およびアメリカの各地域で地域研究のための学際的研究機関の構築に関与してきた専門家により議論が進められ、来る21世紀の少なくとも最初の四半世紀のあいだに地域研究をいかに発展させるかについて意見が交わされます。

第2部は、「生活世界、イデオロギー、国家形成、資本主

義」を共通テーマに、3つのセッションからなり、第1セッション「アフリカの変貌：環境、農業、生活世界」では、農業と環境の変化がアフリカの人々の生活世界をいかに変貌させたかを探求し、環境と生活の持続的な発展につながるアフリカ固有の発展方向の構築に向けて、この地域が持つ在来の知識と技術に焦点が当てられます。

第2セッション「スーフィー思想と地域形成：アジア・アフリカにおけるイブン・アラビーとその学派」は、地域形成の原基、反植民地運動の展開、国家の形成などに注目しつつ、スーフィズムの展開とその知的インパクトを検証します。偉大なスーフィー思想家であり、卓越した法学者でもあったイブン・アラビーに焦点を当てつつ、地域間比較の視点を旨とするようになります。

第3セッションでは、「植民地時代およびポスト植民地時代のアジア・アフリカにおける国家形成」をテーマに、これら地域における近代国家の形成を比較検討し、植民地時代に国家はいかに形成されたか、拡張・縮小されたか、国家が形成・統治・支配しようとした市民社会と国家とはいかに相互に影響し合っているかが考察されます。

(プログラムの詳細は5ページ)

当会議は、一般に公開であり、事前に登録する必要はありません。皆様の参加をお待ちしております。

連絡先

事務局 (京都大学東南アジア研究センター内)

電話：075-753-7392、FAX：075-753-7395

e-mail：secretary_coe@cseas.kyoto-u.ac.jp

もしくは、

石川 登 (京都大学東南アジア研究センター)

電話：075-753-7331

バトリシオ N. アピナーレス(同) 電話：075-753-7308

白石隆教授に第一回読売・吉野作造賞



白石隆教授に第一回の読売・吉野作造賞が贈られた。この賞は、中央公論新社の吉野作造賞と読売新聞社の読売論壇賞が統合されて新しく設けられたもので、その栄えある第一回の受賞者に白石教授が選ばれた。受賞の対象となった作品は、中央公論に連載された『海の帝国』である

が、後に同じタイトルで中公新書にまとめられたものである。同書は、第一に、アジアを歴史的に生成、発展、成熟、崩壊する地域システムとして捉えた点、第二に、二世紀にわたるアジア地域システムの歴史のなかで東南アジアに生まれ成長したシンガポール、マレーシア、インドネシア、フィリピン、タイ国家を比較史的に論じた点、第三に、これまで半世紀にわたる日本・東南アジア関係を位置づけた点において、「栄光と悔恨の二十世紀」から新しいミレニアムを迎えるのにふさわしい卓越した学術作品として評価された。なお、二百年にわたる立体的歴史景観のなかにアジアの地域秩序形成を探ろうとしたこの作品は、白石教授を代表者として現在推進されているCOEの「アジア・アフリカにおける地域編成」プロジェクトに対し、代表者自身の考えを提示したものとしても性格づけられる。

水野広祐助教授に発展途上国研究奨励賞



平成12年度の「発展途上国研究奨励賞」(日本貿易振興会アジア経済研究所)が水野広祐助教授に贈られた。受賞対象となったのは、『インドネシアの地場産業——アジア経済再生の道とは何か?』(「地域研究叢書」7)である。

石井米雄元センター所長が文化功労者に選ばれる



東南アジア研究センター元所長の石井米雄教授(京都大学名誉教授、現在神田外語大学学長)が今年度文化功労者に選ばれた。東南アジア史学研究における輝かしい研究業績と、わが国のアジア研究の国際化と市民化における指導的な活躍がこのたびの栄誉をもたらしたものであり、誠に

喜ばしいことである。

石井教授は、センターが官制化された1965年の7月助教として着任され、1967年教授に昇任、1985年4月から1990年3月まで所長を併任された。その後上智大学教授を経て、1997年4月神田外語大学学長に就任、現在に至って

いる。その間、今年25周年を迎える東南アジア史学会を支えられ、国際アジア歴史学者会議(International Association of Historians of Asia)会長、日本ユネスコ国内委員会会長を歴任された。

石井教授は、長年にわたり、タイ国をはじめとする東南アジアの上座仏教、伝統法ならびに日・タイ関係史などの分野においてわが国はもとより国際的に多大な研究業績をあげ学術発展に寄与するとともに、日本のアジア研究の国際化とアジア理解の促進など国際交流にも多大の貢献をしてこられた。これらの業績に対して、1987年にタイ王室より三等白象勲章、1994年福岡アジア文化賞、1995年紫綬褒章、また文化功労者に選ばれるに先だって今秋国際交流基金賞を授与されている。

渡部忠世元センター所長に大同生命地域研究賞



今年の「大同生命地域研究賞」に、渡部忠世元東南アジア研究センター所長(京都大学名誉教授、現在農耕文化研究振興会代表)が選ばれ、7月5日贈呈式が行われた。この賞は、財団法人大同生命文化基金が地域研究の分野において高い学識と識見を有する研究者に贈るもので、今回の渡部教授の受賞は、長年にわたる「アジア

稲作文化圏の地域研究」が高く評価されたことによる。

同教授は、京都大学農学部在籍の頃から今日に至るまで、アジア稲作圏における稲と稲作文化についての実証的研究を幅広い視野から展開されてきた。1967年にインドシナ半島北部に広くモチ稲栽培圏のあることを指摘されたのをはじめ、東南アジアとくに大陸部における稲作の特色とその変遷を探り、アジアの「稲の道」が、アッサム・雲南地域に収斂することを実証された。その後日本の稲作の系譜と特色についても、アジア的視野から考察を加え、すぐれた見解を次々と公表された。この賞は、稲作の研究を通じ、モンsoon・アジア地域の地域研究を推進し大きな成果を蓄積した功績に対して授与されたものである。

なお、大同生命地域研究奨励賞が市川光雄A・A研究科教授の「中央アフリカ熱帯雨林における狩猟採集社会に関する調査研究」に対して贈られている。

坪内良博 A・A 研究科教授に日本人口学会賞



坪内良博教授(大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、元東南アジア研究センター教授、同センター前所長)の著書、『小人口世界の人口誌』に、去る6月2日、日本人口学会から学会賞が授与された。同学会賞は、人口学において学術上の貢献が顕著であった著書に対して与えられるもの

で、2年に一度、受賞対象が決定され、学会総会の場で表彰が行われる。今回学会賞の対象となった同書は、センターの「地域研究叢書」の1冊として京都大学学術出版会より1998年に出版されたものである。同書において著者は、広く文献を渉猟することによって得られた東南アジア各地域における過去の人口資料とそれらに対する精緻な分析に基づき、小人口世界論を展開する。「豊かな森と海と川が織りなす東南アジアの風土。しかし、ごく最近まで、この地の人口密度は、東アジアの5分の1に過ぎなかった。複雑に入り込んだ生態に生きる人々の強い移動性と穏やかな社会関係が形づくる世界を、歴史的な小人口の中に描き出す」(同書の帯から)。同書への学会賞の授与は、従来狭義の人口学に目を向けることの多かった日本人口学会としては異例の計らいともいえるかも知れない。

本書は、インドネシア農村で多くの人の生業の場となっている小規模工業や小商業のうち、織布産業について資本、労働、土地という生産要素から生産組織、さらに住民組織やネットワークまでを、詳細な実態調査にもとづいて論じている。また、地域住民の信頼関係に経済活動の基盤を置く零細業者と、ネットワークを広げ蓄積を進めてゆく産元問屋らの集合体を地場産業(Community-based Industry)と捉えて論じている。これは、今日のインドネシアで注目され、実践されている「コミュニティーに根ざした開発」の事例研究とも言え、また、土地所有制度をはじめとする近代的な制度を欠く調査地域における経済活動を支える制度とはなにかという問いに対する答えともなっている。イ

ンドネシア住民の大多数を占める「小さな民」が生きる経済の現実を描いた好著である。

その他の主な内容

COE だより・国際シンポ・訃報	(3)
東南アジアセミナー	(4 ~ 5)
人事	(6)
東風南信	(7)
Visitors' Views	(8 ~ 10)
Colloquium	(11)
海外調査だより・連絡事務所だより	(14)

文部省による COE 計画の中間評価が、9月12日、センターで行われた。5カ年計画の折り返し点にあたる3年度目に行われるもので、文部省から派遣された評価委員2名を迎えて研究活動の進捗状況を報告した。

事務局で準備した『研究進捗状況報告書』に沿って、研究代表者の白石隆教授が計画全体の概要を説明した後、東南アジア、南・西アジア、アフリカの各研究クラスター代表者が研究プロジェクトの進行、図書等資料の収集、研究会・シンポジウムの開催などの研究活動の進捗状況を報告した。各クラスターの活動が一望できるよう、それぞれの地域の「原型/変容/転成」という時間軸を縦軸にそして「生態・生活/地域社会・交換経済/国家・地域システム」という研究対象のレベルを横軸に構成し、そのマトリックス上に各クラスターのさまざまな研究活動を配置した図表を用いて説明が行われた。このような図表を用いることによって、COEの全体構想のなかに各クラスターの研究活動がどう位置づけられているのかが視覚的にわかりやすく説明された。

各ワーキング・グループの報告も評価委員に好印象を与えたようである。とくに地図・画像ワーキング・グループによる衛星画像解析の研究成果や地理情報システムを用いた

画像データベースの説明は、いまだ中間的成果の段階とはいえ、評価委員に地域研究の新しい手法を紹介するよい機会となった。各クラスターによって収集された図書を整理する図書ワーキング・グループは、新たに一つの図書室を設置するほどの作業をこなしていることを活動の現状として報告した。附属図書館に配架された整理済み図書の検分も行われ、COEで収集された図書資料が多数の現地語図書を含む全国有数の貴重なコレクションであることを印象づけることができた。

このように、COEの研究活動が順調に進んでいることを報告したが、その一方で反省点がなかったわけではない。図書資料の整理に予想以上の時間と労力をかけねばならなかったことや研究ネットワークが当初計画ほどには形成されていないことなどがその一つである。研究面では、これまで各クラスターを中心に行ってきた研究活動を地域間比較研究としてどう横断的に連関させるのかという課題も残っている。その意味でも、この報告会は、さまざまな反省点を今後の研究活動に反映させ、残る2年半の研究活動をさらに活性化させるためのよい機会でもあった。

(文責：田中耕司)

インドネシアの地方分権化をめぐる 国際シンポに協力

8月1日から5日にかけて、マカッサル(元ウジュンパンダン)のハサヌディン大学でインドネシアの地方分権化に関する国際シンポジウムが開催された。インドネシア大学人類学およびインドネシアの代表的人類学雑誌『アントロポロギ・インドネシア』の編集委員会が呼びかけたもので、センターおよび国立民族学博物館、オーストラリア国立大学などが協力機関として、また国際交流基金、フォード財団、オランダ大使館などが協賛団体として参加した。

「21世紀の幕開け：地方分権化を支持し、地域文化の認識を深め、国民統合を進める」といういささか長ったらしい総合テーマをもったこの国際シンポジウムは、パネル1「地域資源の管理：利益享受と保全」、パネル2「地方分権化を支持する：地方制度の再強化」、パネル3「焦眉的の危機：官僚文化と軍の再定義」、パネル4「多様性の統一：まだ可能か?」という構成が示すように、政治的危機に直面するインドネシアの現状を強く意識しつつ人類学・社会学など人文科学分野の研究者がインドネシアの将来にどんな貢献ができるのかを問う、実践的な課題をもった討論の場となった。

このシンポジウムは、3カ年の連続シンポとして計画されている。その初回にあたる今回は、おもに東部インドネシア地域を対象としたので、会場としてハサヌディン大学が選ばれるとともに、海外からは東部インドネシアを対象に人類学研究を行ってきた欧米や日本の研究者が多く参加した。国内からはインドネシア全土から、人類学・社会学等の研究者、行政官、ジャーナリストなど多彩な参加者があった。

センターは、このシンポの組織委員会メンバーで会場を提供したハサヌディン大学と学術交流協定を交換している。また、これまで南スラウェシ州でしばしば調査を行ってきた経緯があり、立本成文所長、田中耕司教授、濱元聡子特

別研究員の3名が参加した。パネル1において、濱元研究員が「スベルモンデ諸島における環境利用に関わる生業システムと在来知識の現状」を、そして田中教授が「東部インドネシアにおけるクミリと森林資源管理：生態史的視点」を発表するとともにパネル1を代表して全体会議で総司会を務めるなど、シンポジウムを盛り上げるのに貢献した。

本シンポジウムは、続けて、来年度は西部インドネシアを対象にメダンで、そして再来年度は中部インドネシアを対象にバリで開催される予定である。

ニューズレターの「生みの親」 鈴木静夫元センター助教授逝去



1979年1月から1987年3月までの間、センター資料部の助手、助教授として出版業務のみならず資料部業務の統括に尽力された鈴木静夫氏(ミシシッピ州立大学客員教授)が、本年7月17日癌のためアリゾナ州フェニックスの病院で逝去された。享年68歳。

センター在籍中は、毎日新聞社バンコク特派員、外信部副部長という異色の経歴を生かして、叢書『東南アジア研究』などの編集・出版業務の改善に意欲的に取り組まれると同時に、情報発信にも心を砕き、その時々ホットなニュースを写真入りで伝えるという現在の『ニューズレター』を発刊された。また、本務を遂行する傍ら、東南アジア現代政治史、特にフィリピンにおける民族主義運動に関する研究に従事された。1987年4月、静岡県立大学国際関係学部教授に就任、1997年3月に停年退職されるまでフィリピンの現代政治に関する研究に勤しまれ、『物語フィリピンの歴史』(中公新書)『フィリピンの事典』(同朋舎、共編著)など多数の業績を挙げられた。退職後米国に渡り、ミシシッピ州立大学文理学部歴史学教科客員教授としてご活躍中に病に倒れられた。

ご冥福をお祈りいたします。

第24回東南アジアセミナー

「20世紀の東南アジア——軌跡と展望」開催

2000年9月4日から8日にかけて、第24回東南アジア・セミナー「20世紀の東南アジア——軌跡と展望」を開催した。今回は、生態、文化・社会、政治、経済という様々な視点から20世紀の東南アジアを振り返り、今後を展望するというスタイルをとった。総花的アプローチを取った理由は、一つには、20世紀最後のセミナーであったということ、二つには、一つの学問領域で東南アジアを捉えるという、ここ数年の東南アジア・セミナーの傾向を離れてみたかったためである。

参加申請書の到着は締め切り日に集中した。審査を経て、大学院生、学部生を中心とする25名が最終的にセミナーに参加することとなった。特徴の一つ目は、参加申請者、受講決定者を問わず女性の割合が高かったこと、二つ目は、自然系の人の参加申請者、受講者数が少なかったことである。

セミナー初日は、白波瀬昌廣庶務掛長による事務的事項の説明、北野康子助手による図書館案内の後、海田能宏所長代理が当センターにおける地域研究のあり方の変遷を話す形で始まった。その後、加藤剛教授が村から、白石隆教授が国家から20世紀の東南アジアを振り返った。4時限目「自由討論」では、その日の授業担当教官と受講生との間で質疑応答が行われた。授業終了後には、教官も出席して受講生の歓迎会が和やかに行われた。

二日目以降、3時限目までが講義、4時限目が自由討論という形でセミナーは進められ、二日目は生態、三日目は文化・社会、四日目は政治、五日目は経済を中心とした講義が行われた。四日目の授業の後には教官、受講生のコンパが盛況に行われた。



総括すると成功裏に終わったといえよう。受講者へのアンケート結果に基づけば、セミナーの運営、講義内容に対して好意的反応が多かった。様々な角度から東南アジアを理解することができたという意見があった。一方、総花的ゆえに、専門的深みを欠く、受講者の知的好奇心を全日程にわたって持続させることが困難という負の面もあった。また、自由討論が討論でなく、教官と受講者の質疑応答に終始したことに不満があがっていた。

さて、この東南アジア・セミナーは21世紀も継続すべきであろうか。個人的には継続すべきであると思う。東南アジアの特定地域、ある学問領域、総花的アプローチという形で年度ごとにテーマ設定を変えていくのも良い。継続すべきだと考える理由は二つある。関西圏でこうしたセミナーを開催しうるのは今のところ当センターしかなく、東南アジアを知的に理解する貴重な場を提供している。セミナーは当センターの社会的貢献の一環であり、当センターのPRにとって意味がある。(文責：岡本正明)

東南アジアセミナーに参加して

ブラッド・トカン (Vlad Tocan)



私が今回の東南アジアセミナーに参加した動機は東南アジア、特に日本人研究者が考える東南アジアをもっと知りたかったからである。それに、フィールドワークの話を書いたからである。東南アジアの話は、私の研究テーマの中核をなす現代日本人の宗教的意識と、直接には関係がないように思われるかもしれないが、やはり、日本と隣接する東南アジアとのあいだの長期に及ぶ関係や相互の影響などにふれることによって、日本文化を考える時の視野が広がった、ということが言える。

セミナーで中心になったキーワードは、東南アジア研究センターと切っても切れない関係にある「地域研究」であった。この地域研究の意義や方法論をめぐる討論の中から飛び出した先生方・参加者の意見が参考になるものばかりで、私の研究にも必ず役に立つように思う。なぜなら、私も地域研究を試みる一人の学生だからである。その点で今回のセミナーで改めて感じ、これからもより自信を持って示そうと思ったのは、自分の研究に対する「愛情」と「動機」の

重要さであった。セミナーで発表されたほとんどの先生の言葉から、ご自分の研究対象や研究地域に対する「愛情」が漂い、聴いている人たちの注意を引いた。これは毎日の4時間目の時に参加者がした質問の数やその焦点に反映されたのではないと思う。また、休憩中に私以外の参加者の意見を聞くと、研究対象に対して熱意を示された先生方の話が圧倒的に評価され、一方では、あまり理論的で第二次資料ばかりに基づいた話に対しては疑問を表現する人が多かったように感じた。

扱われた問題も私がぜひ聴きたいと期待していたものばかりであった。「民族の形成過程」「民族意識」「歴史の記録」「環境と住民」等がそのいくつかの例として挙げられるが、例えば、欧米・日本・中国と違って古い記録が皆無に近い(または、存在してもほとんど侵略者によるものである)東南アジアにおいては、それぞれの国家・国民がどのように歴史を書こうとしているのか、というような問題が私にとって興味深かった。

セミナーが終わった時点で、あの1週間を振り返って、何が最もよかったかと大学の知人に聞かれた時、新しい知識や観点を学んだことはもちろんだが、それ以上に「人間」そのものや人間が作り上げた「もの」を「人間として」研究する方法に自信がついた、という答えが自然に出た。

(京都大学大学院人間・環境学研究所)

東出 紀子



私は地域研究科で文化人類学的な調査を続けている。当初、調査対象の人々と自分がいかに違う世界で育ったのかを知りショックを受けたが、同時に、近代化の過程で会うものは限りなく共通していることにも大変興味を持った。そして、顔の見える人々と問答をしていくうちに彼らの

価値観を描くことの難しさに直面した。それが私の研究の原動力であり、今回のセミナーに参加した動機でもある。

「地域」という言葉自体が様々な意味合いを含んでいることが「地域研究」を捉えにくいものになっていると思う。センターが目指す「地域研究」についての海田先生のガイダンスに始まり、セミナー全体を通して、受講生たちの疑問の焦点は「地域研究」の方法や学問的意義にあった。私は当初、地理的な意味合いでの「地域」を念頭に置き、国境を越えることや様々な比較研究に興味を持っていたが、もっと広い意味での「地域」の捉え方もあるのではないかと思うようになった。それはディシプリンの上での地域性のようなものである。たとえ同じ地域、村、人と関わっていても、その対象を把握する視点によって、認識や表象のされ方は必ずしもひとつではない。そうしたとき、ひとつの地域を様々な視点から描き、それを整理して少しでもその対象の価値観に近づこうと努力するのが地域研究であろう。地域研究はあくまでも「場」であり学問になりえないのではないかという意見が受講生の一部から出されたが、私はそうした場を大切にすることに十分意味があると感じた。

今回のセミナーで大変印象に残ったのは、林学や農学を専攻する先生方のお話と経済学の立場からの視点に触れたことであった。たとえば調査対象の人々の信仰について知るためにも、経済活動や農業との関係の中で彼らがどんな取捨選択を行っているのか考えなくてはならない。具

体的に農業の調査をしている先生方の視点に触れ、実際にフィールドでどのように農業を捉えたらいいのか、どのような点で情報交換が可能なのかという感覚をつかむことができた。また、国民、貧困などの様々な言葉のなかに必ずしも客観的ではない価値観が含まれていることを、加藤先生、田中先生、竹田先生、長津先生、速水先生らの調査地域でのお話から読み取ることができた。米倉先生の農村でのグローバリゼーションのお話からは、農業が自然環境のみならず制度、政策、経済状況などと密接に関わっていること、さらに、それをどのように調査したらいいのかを学んだ。逆にこうしたグローバリゼーションや歴史、宗教などを農民の目といったミクロな視点で見るという試みが大変重要だということもわかった。

今回のセミナーは、東南アジアの20世紀という大きなテーマのもとに、多様な分野や地域、大小様々な社会についての話が盛り込まれていたもので、日替わりで大まかなテーマごとにプログラムが設定されていたことはとてもよかった。受講生たちの専攻、関心がまちまちだったので先生方のほうが大変だったのではないかと思うが、ミクロな話とマクロな話をバランスよく聞くことができた。不満が残ったのは、討論の時間が設けられていたのに質疑応答に終始し、必ずしも白熱した議論にならなかったことである。これはむしろ受講生たちの問題だと思うが、せっかく違う分野の先生方に出会えたのだからもっと概念に関わる質問があってもよかったと反省している。とはいえ、受講生の中で、対象地域、専攻、関心などが同じでも様々な視点が存在することを確認しあえたことはよかった。セミナー後や懇親会などで論文や将来の心配などについて大学院生同士の話が出来、貴重な時間を過ごせた。受講生同士で今後も情報交換を続けていきたい。

私としては先生方のフィールドでの様々な出来事、フィールドに対する先生方の想いなどに共感するとともに、そうした想いを論文に書いていく方法や、様々な視点に触れることの出来た貴重な体験であった。ありがとうございました。
(東京外国語大学大学院地域研究科)

国際会議「地域研究:これまでの経験とこれからのヴィジョン」のプログラム

第1部 研究機構の構築

2001年1月19日 9:30 ~ 18:30

Anthony Reid、カリフォルニア大学ロサンゼルス校
Collette Suda、ナイロビ大学
Lennart Wohlgemuth、ウブサラ大学
Charnvit Kasetsiri、タマサート大学
Tong C. Kiong、シンガポール国立大学
原洋之介、東京大学

第2部 生活世界・イデオロギー・国家形成・資本主義

1月20日 9:00 ~ 12:30

セッション1 アフリカの変貌:環境、農業、日常生活
掛谷誠、京都大学
荒木茂、京都大学
Abraham Goldman、フロリダ大学
Emmanuel N. Chidumayo、ザンビア大学

14:30 ~ 18:00

セッション2 スーパー思想と地域形成:アジア・アフリカにおけるイブン・アラビーとその学派
Bilal Kuspinar、マッギル大学
Baharudin Ahmad、イスラーム思想文明国際研究所
(マレーシア)
東長靖、京都大学

1月21日 9:30 ~ 12:30

セッション3 植民地時代およびポスト植民地時代のアジア・アフリカにおける国家形成
Mary P. Callahan、ワシントン大学
William S. Reno、ノースウエスタン大学
Patricio N. Abinales、京都大学

総合討論

栗本英世、大阪大学
片山裕、神戸大学

Terry A. Rambo 教授が着任



2000年11月16日付で、Terry A. Rambo教授が人間環境研究部門教授に着任した。外国人の常勤スタッフとしては、Caroline Hau、Patricio Abinales 両助教に続き3人目。1940年4月3日生。63年ミシガン大学人類学部卒業。72年ハワイ大学Ph. D. (人類学)取得。ワシントン州立大学人

類学科助教授、フォード財団東南アジアプログラム・ポストドクトラル・リサーチフェロー等を経て、75年マラヤ大学人類・社会学科講師。80年イーストウエストセンター上級研究員。

〔主要著書・論文〕

The Development Crisis in Vietnam's Mountains. East-West Center Special Report No.6, 1998. (共著) *The Balance of Nature, the Garden of Eden, and the Power of Policy: Some Observations on Contemporary Environmental Mythology*. *The Asian Geographer* 18(1,2), 1999. *Shifting Cultivation: A New Paradigm for Managing Tropical Forests*. *Bio Science* 50(6), 2000. (共著)

外国人研究員



・Voon Phin Keong (マレーシア)。マラヤ大学文学部教授。招へい期間2000年5月1日～2001年4月3日。研究題目「植民地時代マラヤにおける負債による貧困問題」



・Nik Hassan Shuhaimi Nik Abdul Rahman (マレーシア)。マレーシア国民大学マレー世界文明研究所教授。招へい期間2000年6月9日～12月8日。研究題目「マレー世界における伝統的ブラフ・船」



・Resil B. Mojares (フィリピン)。サンカルロス大学文学歴史学科教授。招へい期間2000年6月21日～12月20日。研究題目「ナショナリストは19世紀フィリピンをいかに構築するか」



・Kannikar Linpissal (タイ)。チェンマイ大学図書館司書。招へい期間2000年9月27日～2001年3月26日。研究題目「タイ出版物の団体名記入について」

招へい外国人学者

・Dararatt Anantansuwong (タイ)。国立経済開発行政大学准教授。2000年3月1日～10日。「国家・市場・社会・地域統合のロジックとアジア経済」

・Na Pombejra Dhiravat (タイ)。チュラロンコン大学教養学部講師。3月3日～18日。「ヘゲモニーの構造変化(ネットワークの比較史)」

・Lee Cheuk Yin (シンガポール)。シンガポール国立大学教養学部助教授。5月15日～21日。「日本における明代中国文学ならびに思想研究」

・Lee Poh Ping (マレーシア)。マレーシア国民大学教授。9月14日～20日。「知的ヘゲモニーの構造(仕掛け): テクノクラシー」 Tong Chee Kiong (シンガポール)。シンガポール国立大学教授。9月17日～23日。「同」

Chalong Soontravanich (タイ)。チュラロンコン大学教養学部講師。10月7日～28日。「同」 Pasuk Phongpaichit (タイ)。チュラロンコン大学経済学部助教授。10月11日～11月9日。「同」

Odine de Guzman (フィリピン)。フィリピン大学人文学科比較英文学部准教授。10月16日～11月15日。「同」 Ukrist Pathamanand (タイ)。チュラロンコン大学アジア研究所准教授。10月19日～11月1日。「同」

・Thanet Aphornsuvan (タイ)。タマサート大学教養学部准教授。10月14日～28日。「ヘゲモニーの構造変化(ネットワークの比較史)」

・Charnvit Kasetsiri (タイ)。タマサート大学教養学部講師。10月15日～29日。「タイ君主政治の保護化」

・Supang Chantavanich (タイ)。チュラロンコン大学アジア研究所助教授。10月19日～11月2日。「1975-1995タイに於ける国境を越えた移動」

・Suthiphand Chirathivat (タイ)。チュラロンコン大学経済学部長・助教授。10月23日～29日。「国家・市場・社会・地域統合のロジックとアジア経済」

センター来訪者

4月12日 Prof. W. G. Clarence-Smith (ロンドン大学教授)

5月12日 Prof. Terry G. McGee (プリティッシュコロンビア大学アジア研究所教授) 5月17日 Prof. Felix Wu (香港大学副学長代理)、Prof. Wong Siu-lun (同)、原武道氏 (同大学助教授) 5月26日 Prof. Charles Macdonald (早稲田大学教授) 6月7日 Dr. Wendy A. Smith (モナッシュ大学アジア研究所マレーシア研究センター所長) 6月12日 林超民氏 (雲南大学副学長)、尹紹亭氏 (同大学教授) 6月13日 Mr. Jukka Viitanen (フィンランド大使館所長) 他1名 7月26日 Mr. Francois Gipouloux (フランス現代中国研究センター研究部主任) 8月23日 Prof. Hy V. Luong (トロント大学文化人類学部長・教授) 9月21日 Mr. Pramoedya Ananta Toer (作家)、Mr. Joesoef Isak (ハスタ・ミトラ編集長) 他2名 9月27日 張公瑾氏 (北京中央民族大学カム＝タイ研究所所長)、范宏貴氏 (広西民族学院民族研究所教授) 他3名

地域研究センター落第生の弁

久馬 一剛



Area Studyなどという言葉すら知らずに東南アジア研究センターのスタッフになった私は、それでも一所懸命、学際的研究の一翼を担わねばならないと考えていた。しかし、当時熱帯アジア諸国の水田土壌の比較研究に携わっていた私にとって、本当に興味があったのはやはり熱帯の土壌のことであり、精一杯関心の幅を

広げても農業生産にかかわる自然条件までであって、農村の人とか社会とか経済にまでは関心が及ばなかった。今になって思えば、まだ土壌学者として一人前ではない自分が、そんな「余分なこと」にまで興味をもつことを自ら禁じていた気味もある。その当時、自分にとって本当に興味のあることをすれば、それがそのまま学際的な地域研究に貢献できるような、地域の民族、言語、社会・歴史といった専門をもっている同僚たちを本当にうらやましいと思っていた。

こんな鬱屈した思いをもちながらではあったが、センターにいたころに、自分の専門の仕事も一番よくできたのではなかったかと思っている。海外へ出張することに何の制約を加えられることもなく、研究費も科学研究費などを割合よくもらっていたのであまり不自由することなく、農学部

の学生を預かったり、アルバイトの人をお願いしたりして人手にもそう不足することはなかった。しかし、やはりセンターの中で何となく居心地の悪い思いは続いていた。自分がセンターの地域研究に積極的に何かを貢献しているという実感がなかったからである。そして、実際、私がセンターでした仕事は、『東南アジア研究』や「東南アジア研究叢書」にも書いてはいたが、土壌学の範囲を一步もでていなかったのである。

こんな思いがあったために、農学部へ帰る話ができたときには、すぐそれに乗ってしまった。11年近くもセンターの祿を食みながら、また先輩や同僚に親切にしてもらっていたにもかかわらずである。確かに農学部へ帰ってからのほうが精神状態はよくなったようだ。それまではよく夢をみてはうなされていたが、そんなこともなくなった。果たすべき義務を十分果たしていないという思いが、あんな夢になっていたのではないかと思う。というわけで、私は自らを東南アジア研究センターからの落第生だと考えている。

今のセンターにはこんな思いをする人はいないだろう。人文・社会・自然のいずれをディシプリンとしてもつにせよ、自ら地域研究を志してセンターにくる人たちはばかりであって、私のように何かのはずみでセンターに籍を置いたなどという人間はもういないだろうからである。しかし、今になってみれば、私のような経験も大変得がたいものであったと思うことがある。

(1967.8 ~ 1978.3 東南アジア研究センター助教授・教授。京都大学農学部教授を経て、現在滋賀県立大学環境科学部教授)

東 風 南 信 REFLECTIONS

忘れ得ぬ経験

上田 曜子



センターは、いわば東南アジア研究のプロ集団である。そのプロ集団を離れ、一般の学生と接していると、プロ集団の中には思いもつかないような経験をすることがあり、東南アジアと日本の関わりについて考えさせられることがある。

某県主催の大学洋上セミナーなるプログラムに講師として参加した時

のことである。これは、約500名の学生が一カ月間、豪華客船に乗船し、中国、シンガポール、オーストラリア、インドネシアに寄港して、各地の学生と交流し、かつ船内で講義を受講するという、いわば海外への修学旅行に授業を付け足したようなプログラムであった。ジャカルタでは現地の大学生との交流会が設けられ、我々は十数台のバスを連ねて、港と大学の間を往復した。私が驚いたのは、パトカーが我々のバスを先導し、ほとんどノンストップで目的地に着いたことである。もっと驚いたのは、パトカーに先導されたバスの中で、学生がカラオケを始めたことである。学生に聞くと、中国でも同様にパトカーの先導で、バスで移動したという。当時のインドネシアはスハルト政権下であり、大統領を始めとする一握りの人物が強力な政治権力を掌握していた。体制が異なるとはいえ、この点は中国と同じである。私としては、なぜ中国とインドネシアで、たかが学生の修学旅行にパトカーを動員することが出来るのかを学生達に考えて欲しかったのであるが、パトカー先導の

バスの中でカラオケを始めた彼らの幼稚さに言葉を失い、啞然としてしまった経験は忘れがたい。学生に限らず、円高になって、東南アジアを旅行する日本人が増加し、東南アジアは身近な存在になったはずである。しかし、東南アジアへ渡航する日本人が増えたことと東南アジアに対する認識が深まったということは必ずしも比例していないようである。

ある地方自治体の市民大学講座で、タイ経済についての話を終えたとき、初老の男性が「なぜタイがそんなに重要なのですか」という問いを投げかけてきた。それは、アジア通貨危機が発生してから一年経った頃で、アジア経済全般に対する信頼が失われ、「21世紀はアジアの時代」といったような楽観論がすっかり姿を消してしまった時期であった。その男性は、「もうアジアの時代は終わったのに、日本にとってタイという国に一体どんな重要性があるというのか」と考えたのかもしれない。

私には、その男性の質問が一般の日本人の東南アジア観を代弁しているように思われた。私が教えている学生にもタイへ行く者は多い。「タイ・ボクシング」「リゾート」、そしてどうやら男子学生にとっては「性産業」もタイへ行く魅力の一つになっているらしい。こういう学生にとっては、タイが民主化を進めていることや、通貨危機で落ち込んだ経済がようやく回復に向かいつつあることなど関心の対象外なのである。

さて、プロ集団の先生方は、東南アジア研究の重要性をどのような言葉で普通の日本人に語られるのだろうか。

(1990.3 ~ 1995.3 東南アジア研究センター助手。現在流通科学大学商学部助教授)

HIGHER EDUCATION REFORM IN THAILAND

By Sukanya Nitungkorn



The need for current education reform in Thailand starts with the problem of low educational attainment of the Thai people due to the low transition rate of primary school graduates to lower secondary education. It was realized that to be able to compete in the world market, Thailand could no longer rely on cheap labor

as an incentive to production and inducement of foreign investment. An attempt has been made to reform the Thai education system and to continuously expand the basic compulsory education from current 6 years to 9 years in 1999 and to 12 years in 2002. The commitment to extend basic education to 12 years was put in the 1997 Constitution. The 1999 National Education Act was enacted stipulating conditions which provide a framework for education reform of the whole system. An increase in basic education will lead to a need to expand the supply of higher education in the future. Given this condition and many other factors such as globalization, technological advancement, tightening of government budget, etc., pressure will be put on the higher education sector to reform in order to be able to cope with the changing environment. Higher education will no longer limit itself to the selected elite group, but has to become available for the masses. With the advance in communication technology and increasing longevity, the new generation of students who look for higher education will vary in age, needs, and places of study. To meet this new challenge, the higher education institutions must be flexible in their management of resources, personnel and curricula design. This calls for freedom to look over their own activities. All state universities in Thailand are scheduled to be autonomous by the year 2002. This will in effect change the status of people working in state higher education institutions from civil servants to university employees. It is also expected that some criteria based on quality and equity will be used in allocating government budget to these institutions. They will also be required to be accountable for their performance both in financial and academic aspects. The Ministry of University Affairs has laid out nine aspects of quality assurance process for higher education institutions to follow for internal and external evaluation of their performance. Internal evaluation is expected to be carried out by institutions themselves annually, and external evaluation will be done by outsiders once every five years. The

imposition of the evaluation process is hoped to improve the quality of education provided by the higher education institutions. It must also be realized that the need to fulfill these requirements takes time and resources away from delivering high-quality education as well. In order to be realistic with the limitation of resources, concentration of effort should first be directed to the top priority activity of teaching, and then extended to research and other activities when the previous ones are well organized. This will lessen the burden of the administration and the faculty members and will bring more cooperation and acceptance from them.

(Visiting Research Fellow)

JOSE RIZAL AND JAPAN

By Resil B. Mojares



Travelers invent the countries they visit. Roland Barthes is the most obvious example who, in his *Empire of Signs* (1970), turns *sukiyaki*, *bunraku* dolls, *haiku*, and *pachinko* into counters in an indulgent play of signs.

Jose Rizal was in Japan almost a century before Barthes and was impelled by a different origin and sense of destination. He was passing through in 1888 after he was virtually forced to leave the Philippines because of the controversy over the publication of his anti-colonial novel *Noli me Tangere* (1887).

Though he was in the country for only 46 days, Rizal was an earnest traveler with a large appetite for learning all he could of the places he visited. He tried to learn Japanese, tirelessly explored Yokohama and Tokyo, talked to people as much as he was able to, and read books. (We have clues as to some of the books he bought in Tokyo: a collection of Japanese fairy tales, William Imbrie's *English-Japanese Etymology* (1884), a Latin edition of *Pharmacopoeia Japonica* (1886), and 15 volumes of Hokusai paintings. Eventually, his personal library would include such works as the Swedish botanist C. P. Thunberg's account of his visit to Japan in 1775, R. P. Charlevoix's history of Christianity in Japan, and a study of the Japanese language by Basil Chamberlain.) Rizal's "Japanese education" continued even after he left. On the boat leaving Yokohama, he met a Japanese named Suehiro Teccho who became his companion in the journey across the Pacific, the continental United States, and then on to Europe. A journalist who was jailed twice in the 1870s fighting government censorship, Teccho was so impressed by Rizal that he later wrote novels modeled after Rizal's own work. (One of the founders

of Japan's first political party, the Jiyuto, Teccho was elected to the Diet in 1890 but died in the same year Rizal was executed by the Spanish authorities, 1896.)

His stay in Japan, Rizal would write, was "a beautiful, golden month." And it was not just because of a "romantic affair" with a young Japanese woman (a vignette students of the hero would later embellish), he was genuinely interested in a country he foresaw would have much to do with the Philippines in the future.

Rizal was conscious of the oneness of Filipinos and Japanese as "Orientals" and that it was in this *Asian-ness* that Filipinos must anchor their claim of separateness and autonomy in the face of European colonialism. Thus, when Rizal set himself to the task of writing an autonomous history for Filipinos, he did not only survey all the source materials he could find on the Philippines, he devoted himself to "the study of everything related to the Far East."

It was not just touristic curiosity that incited Rizal to study Japan. He considered such learning an integral part of his work as a nationalist historian. This is shown in an article he published in *Trubner's Record* (London) in July 1889, in which he compared the Tagalog and Japanese versions of the fable of the tortoise and the monkey. Speculating on the origins of the tale, Rizal surmised that the Tagalog version is older (it has, he said, "more philosophy, more plainness of form" while the Japanese version has "more civilization and, so to speak, diplomatic usage") and went on to raise the possibility of the Malay origin of the Japanese people. Admitting this was speculative, he was nevertheless convinced that the ancience of the tale showed that, before Spanish colonialism, there was "an extinct civilization, common to all the races which lived in that region [i.e., Asia]."

The soundness of Rizal's hypotheses is less important than what he was about. By grounding the Philippines in "Asia," he was claiming for Filipinos a history outside Western colonialism. It was in this context that he "invented" his own Japan.

(Visiting Research Fellow)

THE DECORATED PERAHU OF THE MALAY WORLD

By Nik Hassan Shuhaimi Nik Abdul Rahman



One of the most fascinating aspects of the material culture of the maritime communities of the Malay World is their decorated *perahu*. In the Malay World, *perahu* refers to all types of watercraft irrespective of size or shape. However, in order to differentiate *perahu* type, another particular name will appear after the word *perahu* and thus we have *perahu kolek*, *perahu nade*,

perahu dagang and so on. Many of the *perahu* are gaily painted or even beautifully decorated. To study and to know the history of these enchanting and important artifacts, a researcher has to search. One way of searching is to look for contemporary living examples, which fortunately, are still in abundance and in marvellous array in certain parts of the Malay World such as Indonesia and southern Thailand. From them, one can see details of rigs, masts, plank patterns and rudder supports, which have not changed much for a thousand years, and the decorative elements which show the impact of the various cultural influences such as Hindu and Buddhist and local beliefs.

The search for the decorated *perahu* is not to watch for them at sea because it is not the best place. One can seldom spot them sailing in the sea. Therefore, the best place would be to see them in the many trading harbours or fishing villages that dot the coastlines of the Malay Peninsula and islands of the Malay World and in various museums. My endeavour to search and study these fascinating decorated *perahu* has brought me to remote and strange villages, in some of which time appears to have stood still.

Armed with a tape measure, two cameras and four extra first-class lenses, four sets of camera-batteries and dozens of films and slide-films and a note book, I visited various fishing villages and museums on the Thai and Malaysian Peninsula, the islands in the Riau and Lingga archipelago, Sarawak, Sabah, Kalimantan Barat and Sulawesi in search for the decorated traditional *perahu* during the last six months before coming to Kyoto. I was fortunate to have visited Surabaya, Bali and Lombok a few times in the mid-1990s and to find some of their contemporary examples.

The net result of my survey is the depressing knowledge that the decorated traditional *perahu* are progressively going out of fashion in the fishing and other maritime communities in the Malay World. Among the maritime communities, the decorated *perahu* can be classified into four different types: the *Raja's perahu*, the racing *perahu*, the fishing *perahu*, and the model *perahu* for curing ceremonies. Functionally, the decorated *perahu* are not confined to fishing activities but are also used for activities such as ceremonial and sports. It is apparent that the rate at which the tradition of decorating boats with various types of motifs and designs is dying depends on many socio-economic and cultural factors. One obvious factor is the tempo of the socio-economic change. In the area where fishermen converted their fishing *perahu* from sail to engine-powered, the tradition of decorating their *perahu* will slowly die. Another factor is the religious belief. In areas where Islam is practiced in pure form, the tradition of decorating the fishing *perahu* with un-Islamic motifs and designs will normally also be regarded as un-Islamic. This developmental change can be seen by comparing the contemporary fishing *perahu* in Kelantan and Terengganu with those found in Peninsular Thailand, and by considering the number of decorated *perahu* found in

the Indonesian traditional harbours and fishing villages one can see the dying tradition of decorating *perahu* progressively dying out.

The main reason that the Muslim fishermen in the Malay Peninsula reject the decorative elements is the fact that the motifs and designs used for the decorations are based on the following themes: a) birds, b) animals, c) *Wayang Kulit* characters, d) human beings, and e) plants. All these themes, with the exception of the plants, according to Islamic teachings, are not supposed or allowed to be represented in any art form other than in stylized form.

Therefore, it is important that the dying tradition of the decorated *perahu* culture be recorded and studied in order to convey to our future generations the richness of the traditional culture of the maritime communities of the Malay World. The decorated *perahu* are not just beautiful products of very high artistic traditions, they are also a source of much information about religious belief and other aspects of the culture of the maritime societies in the Malay World, which can be gleaned and extracted from the decorative motifs and designs found on them.

(Visiting Research Fellow)

FINDING TRANQUILITY AT TAKARAGAIKE PARK

By Che Puteh Ismail



In the middle of last year, I was one excited lady. Eagerly anticipating the pleasure of moving into a new house which overlooks a golf course, I could imagine the peaceful nature of the surroundings and the quiet ambience of the neighborhood. To be close to nature has always been an aspiration since the beginning of my career

in busy Kuala Lumpur, as I was brought up in a *kampung* (village). Naturally at ease in peaceful surroundings, I was quite at odds with the situation in Kuala Lumpur, where everybody lives in huge housing estates or towering condominiums. So when we finally moved to the new house, I was very happy to say the least. I would go out for morning walks and evening strolls in the quite and peaceful surrounding neighborhood that comprises two golf courses. The window to my living room opens out overlooking a fairway and the putting green of the golf course. I was never more at ease with the situation.

Then earlier this year, in late March to be precise, I was feeling a little sad to leave my country but looking forward nonetheless to going to Kyoto and being attached to the Center for Southeast Asian Studies. I was given this period to process and catalog books on Indonesian and Malay language and will be forever grateful for the opportunity. Nevertheless, my image of Japan as an in-

dustrial powerhouse and a developed country with frenetic workers hurrying back and forth did not give me much hope for a relaxed atmosphere of peaceful thoughts and deep thinking. Was I ever more wrong. Initially, this preconceived image of industry and busyness was proven upon landing at Kansai International Airport. During the ride by airport limousine to Kyoto, I was greeted by rows upon rows of factories and warehouses with houses build close to one another. The first two weeks of staying at the temporary housing in a condominium only confirmed my image further. Yes, Japan in general and Kyoto in particular is a busy community where all that is important is work, work, and more work. I was beginning to believe that little story where the relaxation of the workers consists of eating *yakitori*, drinking *sake* and singing in *karaoke* joints late into the night.

Two weeks later, I moved to the International House at Shugakuin. Another apartment, I thought to myself, where the only difference is that the surroundings are a little quieter. Then one weekend, as I was strolling about getting to know my new surroundings, I followed an aged couple walking energetically on their morning walk. Crossing the bridge leaving Shugakuin railway station they led me to a beautiful lake which was full of Japanese carps, turtles and wild ducks. The majestic gliding of the fishes and ducks, the eerie quietness of the park and the wooden resting huts blending artistically with the scenery took me by surprise. I was astonished at this sight. The lake was so tranquil in the morning light and the peaceful nature of the surroundings was so absorbing. I stood and stared. Is this Japan? The jungle was so pristine and the water was so clear. I was already impressed with the clear water of the Kamo river but to have this huge lake with so much life in it was astonishing. Upon arriving back at the International House, I looked up the map of Kyoto and found out that I had stumbled upon Takaragaike Park. I have subsequently visited the various parks in and around Kyoto but I have yet to find a place as serene and tranquil as this park. And so it was that during the next few months, I made it a habit to take my morning walk around this scenic lake while viewing and gratefully enjoying the surrounding ambience which was so peaceful. And when it is time for me to take my leave, aside from missing my newfound friends at the Center for Southeast Asian Studies in particular and Kyoto University in general, I will forever have fond memories of Takaragaike Park. My hope is that the tranquility of this park will forever be shared by the future generations.

(Visiting Research Fellow)

"The Cultural Turn in Philippine Historiography" by Caroline S. Hau, May 25, 2000.

When did the idea of "culture" acquire methodological and substantive importance in the study of Philippine history? This talk charts the itinerary taken by post-war Philippine historiography and the role played by "culture" in framing and shifting the debates within the field. Culture was seen as both a problem and a solution by Filipino historians. On the one hand, historians had to confront the colonial legacy of an academic scholarship which characterized lowland Philippines as bereft of authentic "culture." On the other hand, this inauthentic culture was capable of effecting a reconciliation of contending social classes within Philippine society, of healing the rift created by the conceptual cleaving of Philippine society into elite and masses. One important theoretical implication of this cultural turn in Philippine studies, and one that resonates with Southeast Asian studies as well, is the recognition that the "inside" is shaped by its encounter with the "outside." This talk stresses the idea of transformation in everyday life, the novel, complex ways in which Filipinos reinvented themselves and their relations with the "outside."

"Ryukyuan Contacts with Southeast Asian Countries in 15-17 Centuries through *Rekidai Hoan*" by Takeshi Hamashita, June 22, 2000.

The *Rekidai Hoan* (*Lidai Baoan*, Precious Documents of Successive Generations [of Ryukyu Kingdom]) is a compilation of a large number of documents, written entirely in Chinese, relating to Ryukyuan contacts with China, Korea, and eight Southeast Asian countries (or more exactly, port towns), covering the period from 1424 to 1867. They are Siam, Malacca, Palembang, Java, Sumatra, Sunda-Karapa, Patani, and Annam. Until the late Ming period, the Ryukyu Kingdom sent missions to Southeast Asia to buy pepper and sapanwood to send as tributary commodities to China.

The period from the late 14th century to the early 16th century was one of the most prosperous ages in the history of the little kingdom of Ryukyu situated on the western rim of the Pacific Ocean. This prosperity was due in large measure to the wide-flung trading activities of its people, who traversed the East and Southeast Asian waters as self-made agents of entrepot trade for countries bordering those waters. Not only were the Ryukyuan in contact with China and Japan, they also established and maintained relations with Korea and Southeast Asian countries.

This paper examines the role of Ryukyu merchants in the trade of pepper and sapanwood between Southeast Asia and China as intermediaries in the tributary trade system of the Ming period in comparison with the pepper trade by Chinese and European merchants in Southeast Asia.

7月12日「情報処理室の運営について」木谷公哉

情報技術 (Information Technology) が革新していく中で、東南アジア研究センター内で情報技術に関して今後どのような運営をしていくかについて議論した。議論するにあたってまず、1999年4月から2000年6月にかけて行ってきた革新的な実績 (ネットワーク構造・高速化や、安全面での問題点と対策等)、バンコクオフィスの現状 (日本とタイ間、タイ国内の通信事情等) を具体的に説明した後、今後すべきことと3年間以内の目標を述べた。ここで言う安全面での問題点とは、「クラッカーによる侵入」を意味し、侵入には直接的なものとはコンピュータウイルス等による間接的なものに分類した。

"The Origins of the Present Crisis in the Southern Philippines" by *Patricio N. Abinales*, September 28, 2000.

This talk argues against two popular myths that are being peddled by the different actors involved in the "war" in southern Mindanao: first that the conflict is primarily an ethno-religious one, and second that the Philippine military has mishandled the campaign against the Moro Islamic Liberation Front (MILF) and the kidnapping group, the Abu Sayyaf. However, the talk only focuses on the first myth.

I then proceed to elaborate on an opposite explanation to the ethno-religious myth. I suggest that persistent divisions within the Muslim communities in southern Mindanao have negated Muslim primordial sense of identity. Moreover, in most of southern Mindanao's history, ethno-religious identity was employed to hasten Muslim integration to the Philippine body politic rather than separation. Facilitating this mutual accommodation between Muslims and the Filipino nation-state were the Muslims' own "strongmen" — politicians who employed linguistic, regional, and ethno-religious labels to mobilize the electorate. They were, in a way, no different from other Filipino politicians.

It was only in the late 1960s when a more intrusive national state eroded the powers of these local strongmen, when the land frontier's closing began to generate social tensions, and when a generation of young Islamic radicals appeared that ethno-religious politics began to take a more separatist and radical hue. When martial law was declared and Marcos tried to disarm the Muslims, the separatist war of the Moro National Liberation Front (MNLF) broke out.

The impasse of the MNLF rebellion led to its decline and the ascendance to power of new groups, the most successful of which is the MILF. Military efforts to divide the Muslims also brought about the organization of pseudo-separatist groups like the Abu Sayyaf. With the formal end of the MNLF war, the MILF took over the separatist struggle while the Abu Sayyaf, like many armed groups sponsored by the government, turned into a kidnapping enterprise.

The talk ends with the prognosis that the current war will only accentuate an already splintered Muslim *umma*.

Colloquium

研 究 会 報 告

"Core University Program Workshop" (於センター)
10月25、27日
Charnvit Kasetsiri (タマサート大学) Re-writing Contemporary Thai History Chalong Soontravanich (チュラロンコン大学) Maha Sila Viravong's *Phongsawadan Lao* (1975)
Thanet Aphornsuvan (タマサート大学) The World We Haven't Lost: Reflections on the Past and Future of Thai Intellectuals' Worldview Pasuk Phongpaichit (チュラロンコン大学) Social Movements in Thailand: Theory and Prospect Supang Chantavanich (同) International Migration Ukrist Pathamanand (同) The Resurgence of U.S. Influence on Thai Economic Policy Suthiphand Chirathivat (同) Globalization and Openness: The Recent Experience of ASEAN

Special Seminar (於センター)
4月10日 Andrew J. Abalihin (コーネル大学) Modernity Is Colonial: Some Reflections on the Introduction of Prostitution Regulation in the 19th Century Netherlands Indies and Spanish Philippines 4月20日 Roengsak Katawatin (センター外国人研究員) Improvement of Production Efficiency of Hom Mali Rice in NE Thailand 5月11日 James Siegel (コーネル大学) After the New Order, Witches 5月26日 Charles J-H Macdonald (早稲田大学アジア・太平洋研究所客員教授) Naming Systems in Southeast Asia and Their Relevance for Social Anthropology 6月1日 Aris Poniman and Roengsak Katawatin (センター外国人研究員) Thematic Geographical Information Integration of Land and Sea; Mapping Salt-Affected Areas in Northeastern Thailand 6月8日 Voon Phin Keong (センター外国人研究員) Cartographic Records and Research on Socio-economic Issues 6月22日 Terry McGee (ブリティッシュコロンビア大学) The Urban Future of Vietnam Reconsidered 9月13日 Sukanya Nitungkorn (センター外国人研究員) Higher Education Reform in Thailand 9月18日 Lee Poh Ping (センター招聘外国人学者) The Political Economy of the Anti-Tanaka Riots of 1974 9月21日 Pramoedya Ananta Toer (作家) Dialogue with Pramoedya: Literature, History and Future of, by, for Indonesia 9月22日 Tong Chee Kiong (センター招聘外国人学者) Talking Culture: Singaporean Chinese and Business with China Chinese 10月19日 Song Xianfeng (センター外国人共同研究者) The Construction of Metadatabase of Southeast Asian Studies 10月24日 Charnvit Kasetsiri (タマサート大学) What I Have Seen in East Timor 10月31日 Shamsul A. B. (マレーシア国民大学) From "Malay Studies" to "Malay World Studies": An Invitation to Rethinking

ポスト・フィールドワーク・セミナー (於センター)
6月8日
濱元聡子 (センター) 「島の境界・ひとの移動——マカッサル海峡から戻ってきて」

「民族間関係・移動・文化再編」第8回研究会 (於センター) 7月8日
泉経武 (東京外国語大学) 「世俗経験としての『開発』活動——タイ東北地方の開発僧と村落宗教の再編」 黒田景子 (鹿児島大学) 「マレーシア・ケダールのタイ人居住地区の状況について」

「国家・共同体・市場」研究会 (於センター) 7月17日
Ninasapti Triaswati (インドネシア大学) Lessons to Be Learned from the Current Economic and Social Crisis in Indonesia

"Political Ecology of the Mekong River Basin" (於センター) 9月14日
Andrew Wyatt (シドニー大学) Environmental Assessment in Boot Projects: Case Studies in Vietnam and Laos Mak Sithirith (カンボジアNGOフォーラム環境ネットワークコーディネーター) Effects of Vietnamese Dam Construction on Cambodian Fishing Communities

「メコン流域共同セミナー」(於センター) 10月6日
笠井利之 (立命館大学) 「メコン委員会から見た流域圏開発」

「東南アジア大陸部」第2回研究会「モン特集」(於センター) 10月11日
安井清子 (東京外国語大学) 「ラオスにおけるモンの歴史と生業の変化」 谷口裕久 (京都文教大学) 「Who Are the Hmong?: 生活実態の視点から行う問題提起」

"Joint Seminar on People, Environment and Land Use Systems in Mainland Southeast Asia" (於センター) 10月30日
Philip Hirsch (シドニー大学) An Applied Political Ecology of the Mekong Region 松本悟 (メコンウォッチ・ジャパン) 「世界ダム委員会とパクムンダム」

東南アジア地域研究ゼミ
第6回 6月20日 江口佐和子 (京大人間・環境学研究所) 「トンコナンから出て行った人々——インドネシア・トラジャ地方におけるペンテコステ教会の発生と社会的コンフリクト」 葉山アツコ (京大A・A研究科) 「イフガオ、棚田耕作民にみる資源の重層的利用権と管理」
第7回 9月18日 及川洋征 (東京農工大) 「混栽樹園地の利用・展開にみられるジャワ島の地域性」

東南アジアの自然と農業研究会
第97回例会: 10月20日 三浦励一 (京大農学部) 「西アフリカにおける野生イネ科穀粒の採集利用」

「工場労働者の第1世代をめぐる職務意識——ラオスを対象として」大野昭彦；鈴木基義 「ミャンマー乾期灌漑稲作経済の実態——ヤンゴン近郊農村フィールド調査より」藤田幸一；岡本郁子 「『水王』の系譜——スレイサントー王権史」北川香子 サラワク州イバン村落における湿地田稲作——植付け方法にみる適応戦略」市川昌広 Farmers' Views of the Forest: Perceptions of the Forest and the Natural Environment in Northeast Thailand. Wataru Fujita 書評 William A. Collins. *The Guritan of Radin Suane: A Study of the Besemah Oral Epic from South Sumatra*. Minako Sakai Kirstin Pauka. *Theater and Martial Arts in West Sumatra: Randai and Silek of the Minangkabau*. 福岡まどか *Overturnd Chariot: The Autobiography of Phan-Boi-Chau*. Translated by Vinh Sinh and Nicholas Wickenden. Patricio N. Abinales Christiaan Heersink. *Dependence on Green Gold: A Socio-economic History of the Indonesian Coconut Island Selayar*. 濱元聡子 現地通信「カンボジア大学事情」小林知

Fund-Raising Activities of a Cooperative in the Red River Delta: A Case Study of the Coc Thanh Cooperative in Nam Dinh Province, Vietnam. Masayuki Yanagisawa Education and Economic Development during the Modernization Period: A Comparison between Thailand and Japan. Sukanya Nitungkorn Forest, Bateks, and Degradation: Environmental Representations in a Changing World. Lye Tuck-Po 「フィリピンの農村工業における持続性——アンティーク州バリ村の土器産業」永井博子 「革命期を生き抜いた植民地期原住民政官吏 (パンレ・プラジャ)——インドネシア・西ジャワ州の場合」岡本正明 「サラワク州イバン村落における移動湿地田稲作の変遷」市川昌広 書評 Hayami, Y.; and Kikuchi, M. *A Rice Village Saga: Three*

出版ニュース

Decades of Green Revolution in the Philippines. 藤田幸一 Gregory Forth. *Beneath the Volcano: Religion, Cosmology and Spirit Classification among the Nage of Eastern Indonesia*. 中川 敏 Elenanor Mannikka. *Angkor Wat, Time Space and Kingship*. 荒樋久雄 Khin Maung Kyi et al. *Economic Development of Burma: A Vision and A Strategy*. 吉原久仁夫 村瀬哲司. 『アジアの安定通貨圏——ユーロに学ぶ円の役割』吉原久仁夫 現地通信「呪術師と暮らして」濱元聡子

地域研究叢書 13

立本成文. 2000. 『家族圏と地域研究』京都大学学術出版会.

研究報告書シリーズ

Hayase, Sinzo; Domingo M. Non; and Alex J. Ulaen, compiled. 1999. *Silsilas/Tarsilas (Genealogies) and Historical Narratives in Sarangani Bay and Davao Gulf Regions, South Mindanao, Philippines, and Sangihe-Talaud Islands, North Sulawesi, Indonesia*.

Che Puteh Ismail. 2000. *Library Acquisitions List Bahasa Indonesia and Bahasa Malaysia*.

———, compiled. 2000. *Bahasa dan Kesusasteraan Melayu Sebuah Bibliografi 1990-1999*.

<その他の出版物>

Yoshihara, Kunio. 2000. *Asia Per Capita: Why National Incomes Differ in East Asia*. Singapore: New Asian Library; London: Curzon.

Patricio N. Abinales. 2000. *Making Mindanao: Cotabad and Davao in the Formation of the Phillipine Nation-State*. Ateneo de Manila University Press.

白石 隆. 2000. 『海の帝国』中公新書.

センター人の動き

杉島敬志 (4月10日～12月3日) インドネシア「ジャカルタ連絡事務所管理運営及び東南アジアの親族構造に関する研究調査」安藤和雄 (4月17日～5月16日) バングラデシュ「住民参加型農村開発行政支援計画の事前調査」北野康子 (4月24～30日) シンガポール「国際会議『東南アジア図書館委員会』出席」河野泰之 (5月8～28日) ベトナム、ラオス「農業資源評価にかかる現地調査等」柳澤雅之 (5月8日～6月3日) ラオス、ベトナム「北部ラオス及びベトナム山地部の農業に関する研究拠点形成」阿部茂行 (5月15日～11月14日) タイ 『タイにおけるマクロ経済政策とその歴史・制度・有効性』研究調査」白石隆 (5月28日～6月4日) オーストラリア「インドネシア情勢についての意見交換」吉村充則 (6月6～11日) マレーシア「植生放射分光多点計測にかかる事前調査」濱下武志 (6月8～16日) 韓国「国際華僑研究会大会参加等」C.Hau (6月14～21日) アメリカ合衆国 『アジアにおける言論と論争』研究会参加等」河野泰之 (6月20～24日) ラオス「調査研究計画打合せ」藤田幸一 (6月24～30日) ミャンマー「ミャンマー国プロジェクト形成調査」濱下武志 (6月25日～7月10日) 香港「中国ビジネスヒストリー会議参加等」吉原久仁夫 (6月26～30日) 韓国 『東アジアと中国の世界貿易機構への参加』会議参加」安藤和雄 (6月26日～8月6日) 中華人民共和國、ラオス、バングラデシュ 『異生態系接触に関わる人口移動と資源利用

システムの変貌』現地調査」P. Abinales (6月30日～7月15日) フィリピン「ヘゲモニーについての調査」木谷公哉 (7月3～7日) タイ「インターネットの向上とインターネット電話の設置」白石隆 (7月6～13日) マレーシア、インドネシア「アジアフェローシップ連絡協議会出席等」立本成文 (7月7～10日) マレーシア、タイ「同」石川登 (7月8日～8月7日) マレーシア 『異生態系接触に関わる人口移動と資源利用システムの変貌』現地調査」田中耕司 (7月15日～8月14日) インドネシア「同」C.Hau (7月9～17日) フィリピン「国際フィリピン学会出席等」藤田幸一 (7月11～20日) インド「インド農業政策に関する現地調査」河野泰之 (7月15～21日) ベトナム「農業資源評価のための現地調査」吉村充則 (7月15～25日) オランダ「国際写真測量リモートセンシング学会出席」西淵光昭 (7月17～31日) バングラデシュ、マレーシア「腸管感染症原因菌の動態に関する調査」山田勇 (7月19日～8月2日) 中華人民共和國「文化と生物多様性国際会議出席等」海田能宏 (7月21日～8月13日) バングラデシュ 『バングラデシュ参加型農村開発行政支援プロジェクト』発足準備とセミナー開催」濱下武志 (7月26～31日) シンガポール「明清史研究国際会議参加」吉原久仁夫 (7月26日～8月6日) マレーシア「アジア歴史学者国際学会会議出席等」水野広祐 (7月27日～2001年1月25日) インドネシア「開発経済学等の講義」藤田幸一 (7月31日～8月13日) ミャンマー「アジア諸国の発展段階別農業・農村開発基礎調査」立本成文 (7月30日～9月10日) インドネシア 『異生態系接触に関わる人口移動と資源利用システムの変貌』現地調査」山

国境線上の仏塔——チェンマイ・ウィエンヘーン郡から——

林 行夫

この夏、タイ・ミャンマー国境のチェンマイ県最北端ウィエンヘーン郡ラックテン村を訪ねた。村の小高い丘の上に金色の仏塔がそびえる。そのすぐ足下にミャンマーへの通関所があり、ミャンマー側の寺院が真向いにみえる。仏塔がミャンマー様式なので、まるで両者が連なったような構図。この緩衝地区には観光客の姿はなく、シャン・ステート出身のシャン(タイ・ヤイ)を筆頭に、チンホー、リス、カレン人が往来する。仏塔も同地域のシャン人が国境を越えて共同で修復建立した。

当地のほとんどのシャン人はタイ国籍ないしIDカードをもたない。2000年8月現在ウィエンヘーン郡の公称人口は2,141人。これはタイ国籍を所持する人びとの数である。同郡ムアンヘーン区コーンロム寺の郡僧長K師は、雨安居入時の郡管区統計(仏教寺院21、僧侶60、見習僧258)を宗教局に提出している。この数値もタイ国籍をもつ者に限られ、シャン人を主とする無国籍者を含まない。同郡では今年169人の見習僧を出家登録したが、そのうち137人がシャン(表記上タイ・ヤイ)、リス5、カレン7で、タイ国籍をもつ子弟はわずか20だった。メーホンソン出身のシャン人でもあるK師は、一人でも多く勉学と社会的経験の機会を得るようにと国籍の有無を問わず勤勉誠実な少年僧にタイサンガの僧籍証を発行してきた。

ところが、先の8月の宗教局通達で、僧籍証様式が一部改正され、従来なかったIDカード番号記入を義務づける動きが濃厚となり、遅くとも来年には実施の運びという。K師の所業は、数年前ラオスからの1万近いモン(メオ)人の避難者を受け入れていたサラブリー県のタムクラボーク寺同様、スパイ隠しか無国籍者闖入を許す違法僧と糾弾されることになる。K師いわく、これまでもある日忽然と姿を消して行方不明となった少年僧は数多い。タイ国籍を得るために国境越えして僧院に過ごす者もいる。国境線上の寺院は格好の隠れ蓑なのだ。

同郡に限らず、こうしたことはタイとラオス、カンボジアとベトナム(南部)の国境を接する上座仏教徒の間でごく普通に行われてきた。旧来の親族、交易関係、そして地域に根ざす仏教実践は、国家を成立させる国境という制度を空洞化する。市場開放経済路線が後押しする近年の国境域の観光政策や文化交流事業が盛んでも、こうした越境行動は黙認されはすれども歓迎されない。ラックテン村の寺では宗教局プロジェクトの教法試験準備用の授業を朝夕に実施する。ナモータサーに始まる三帰依文と釈迦伝を標準タイ語で朗唱する無国籍の少年僧の声が、ミャンマー側の寺院にこだまする。

仏塔の傍らでバンコク様式の布薩堂が建立中であった。宗教局は講堂や仏塔の様式は放任するものの、得度式を行う場である布薩堂にたいしてはタイ国標準の「規格」を示す。国境線上の仏塔に、国境を越えて暮らす人びとと国境をつくる力とのせめぎ合いを見た。(センター助教授)

田勇(8月4日~9月10日)同「同」白石隆(8月14日~9月3日)タイ、インドネシア「共同研究『ヘゲモニーとテクノクラシー』データ収集」西村重夫(8月16~30日)フィリピン、マレーシア、シンガポール「島嶼部東南アジアの教育に関する文献資料の収集調査」藤田幸一(8月17~29日)タイ、ミャンマー「タイ・ミャンマーにおける稲作部門及び稲作政策の比較研究」

ジャカルタ

杉島 敬志

私が前号で書いた「ジャカルタ連絡事務所だより」には思わぬ反響があった。今夏の調査シーズンに連絡事務所を訪問された何人もの研究者から「ジャカルタはそんなに危ないのですか」という質問をしばしば受けた。

この「犯罪百科都市」について話しはじめるときりがなく、「はい」の一言で話をきりあげるわけにもいかない。そこで返答のかわり話題にしたのは、この3月まで連絡事務所が入っていた家でおこった事件である。7月中旬の夜に3人組みの泥棒が押し入り、うち1人が付近の住民につかまって撲殺された。もう1人はどこに隠れていたものが、翌朝、敷地内に潜んでいたところを捕捉され、3人目は身の安全をはかるために仲間への暴行にくわわってから逃走したらしい。

住宅街であれ、路上であれ、一般市民が泥棒をつかまえると、ふくろだたきにして殺してしまうケースがあとをたない。最近、知人が路上で携帯電話をうばわれた。運よく付近にいた人々が犯人をつかまえ、携帯電話はもどったが、犯人がボコボコに殴られはじめたので、今度は犯人を救助するために、警官を呼びに走ったといていた。

新しい手口の犯罪が毎日のように開発されつつある。にもかかわらず、警察はうまく機能しない。捜査は商品交換の対象であり、被害者がかなりの金をつまないと警察は捜査をおこなわない。しかし、運悪くつかまった容疑者も無罪放免を金で買うことができる。したがって、警察は座っていても被害者と容疑者の双方から金をえることができる。

実際にそうなのかどうか私は知らない。しかし、相当数のジャカルタ市民がジャカルタで生きることにともなう安堵なき無援の状況をこのようなイメージでとらえているとはいえるだろう。そのひとりである連絡事務所職員のジュンピさんの次女が9月の新学期から専門学校で勉強することになっていた。しかし、入学式に出かけていくと、専門学校は消えていた。あわてて父が調べてみると、専門学校は架空のものであり、入学金を詐取されたことが明らかとなった。彼はおなじ詐欺の被害者である多数の学生や親とともに警察に何度も足をはこんだ。だが、警察は専門学校の理事長を呼んで事情聴取をおこなったものの、理事長をむしろかばう態度にでているという。そうすると、犯人は逮捕されず、入学金も戻らず、事件は解決しないだろうというのが現在のジュンピさんの判断である。

(センター客員)

2000年11月16日発行
発行 〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町46
京都大学東南アジア研究センター
Tel (075) 753-7344
Fax (075) 753-7356
e-mail: editorial@cseas.kyoto-u.ac.jp
編集 石川 登・米沢真理子